

## 病院における取り組み

### 「看取り期の作業療法」

松阪中央総合病院 田中一彦

#### <講義概要>

厚生労働省の調査によると、国民の60%は人生の最終段階に入った場合は、自宅での療養を望んでいるが、40年前頃より死亡場所が在宅から病院へ移行され、現在は80%近い方が病院で最後を迎えている。

そのため、人生の最終段階を過ごす場の選択肢を増やせるよう、病院から居宅系施設、在宅看取りへと変化しつつあるが、まだ病院での関わりが中心となっており、医療職の看取りに対する対応も増加している。当研究会会員への調査でも8割の会員が看取り期まで作業療法の提供を行っていると回答している。

看取り期は、日単位で症状が変化していく時期とされているが、作業療法の対象者は多彩で、看取り期への経過も疾患により異なり、回復するのか死に至るのか見極めが困難な例や急激な症状変化による突然死もあり、十分に時間をとることなくお別れを迎えることも少なくない。

今回は、看取り期における関わりについて会員の皆様と一緒に考える機会になれば良いと思います。

#### <略歴>

1990年、作業療法士免許取得。同年、松阪中央総合病院勤務、その後 鈴鹿中央総合病院勤務を経て現所属。両病院とも急性期リハビリテーションを主な業務とし、脳血管疾患、整形外科疾患、神経難病、高次脳機能障害、がん疾患対象者に対する作業療法に携わる。

日本作業療法士協会 認定作業療法士、終末期・緩和ケア作業療法研究会 副会長、三重がんリハビリテーション研究会 実行委員、一般社団法人エンドオブライフ・ケア協会 会員  
ユマニテク医療福祉大学校・鈴鹿医療科学大学非常勤講師